Gay Surrogacy in Canada

カナダの **Gay Surrogacy**

Dr. Sophia Fantus

Q.　研究者としてのバックグラウンド、関心領域を教えてください。

カナダの出身だが、現在は米国のテキサスで仕事をしている。トロント大学で宗教とバイオエシックスを専攻し、学士号を取得した。その後、ニューヨーク大学でソーシャルワークの政策と実行を専攻し、修士号を取得した。またこの間、ニューヨークにあるリプロダクティブライツにフォーカスした LGBTQ センターでインターシップを終えた。この頃から、生殖補助医療に関わる LGBTQ の人々の経験に関心を持つようになった。

ソーシャルワークとバイオエシックスの分野で博士号(Collaborative PhD)を取得した。質的研究の手法を用いて、代理出産を依頼したカナダのシングルとゲイの男性について研究した(主にカナダ国内で代理出産を依頼した人々)。焦点を絞り、博士論文のための研究プロセスを明確化することができた。当時、その分野の経験的研究は限られていた。

テキサス、ヒューストンで臨床倫理のポスドクを終えた。その後、同じ市内の病院で臨床倫理の分野で 2 年間仕事をした。

現在は、アーリントンのテキサス大学で助教をしている。

Q. これまで行った研究について、教えてください。調査で、困難なことはありましたか? どのように対応しましたか。

自分が学位論文を書いたとき、カナダの代理母と依頼者の経験に関する研究はほとんどなかった。カナダでは、商業的代理出産が犯罪化され厳しく罰せられるために、代理出産のプロセスにはアンダーグラウンドな面がかなりある。法律はかなり曖昧で、医療費の支払いは認めているが、その他の部分について線引きがどこにあるのか曖昧。そのため、代理出産の経験を話してくれる対象者が非常に少ない。

研究手法は、解釈学的現象学的分析を用いた。そのときの政治状況に関連した代理出産の生きられた経験を明らかにしたかった。カナダは、LGBTQ の権利の分野では非常に進歩的で、そのことはこの研究にとって特筆すべきバックグラウンドだった。一般的な調査では、代理出産の経験に関して深い視点を持つことは叶わないが、質的研究なら可能になる。だから自分は質的研究を用いた。

これまでの研究の多くが、商業的代理出産が行われている国のもので、カナダではこの分野についての研究は非常に少なかった。3 つのポイントにフォーカスした。

1)代理母になった動機は何か?
2)代理母と依頼者の個人的関係はどのようであったか? (妊娠前、妊娠中、出産後)
3)ゲイの依頼親にとっての制度的サポート、及び障壁は何か? 政策と実態はどうなっているか?

1 時間から 2 時間ほどの半構造化インタビューを実施した。それは、対象者の家でやることもあったし、オンラインや電話越しに会話することもあった。対象者

@YURI HIBINO

の多くが、ぜひとも自分のストーリーや経験を聞いてもらいたいと思っていた。というのは、以前そのような研究に誰も参加したことがなかったから。

たくさんの困難に遭遇した。一番難しかったのは、研究に参加してくれる対象者をリクルートすることだった。最終的に、6 人の代理母と、16 人の依頼者(全てパートナーがいるゲイ男性)が研究に参加してくれた。参加者には、25 ドルのギフトカードを贈ったが、それでも対象者のリクルートはかなり難しかった。今にしてみれば、自分の研究をどのように「売る」かについての経験が欠けていたからだと思う。クリニックに連絡してみたり、フェイスブックグループに参加してみたりしたが、なかなかうまくいかなかった。対象者は忙しく、インタビューに時間を割いてもらうのに苦労した。

不妊治療クリニックの中には、匿名性に対する懸念から、研究に協力してくれないところもあった。このことは、カナダの代理出産のアンダーグラウンドな性格を物語っている。代理母と依頼者は、法律のことをとても心配していた。法律では、医療費の支払いは許されているが、(それ以外のことに)対価を支払うことは犯罪だ。この懸念を和らげるため、金銭のことは質問しないと伝えたが、それは相手になかなか伝わらなかった。

もう 1 つの主要なハードルは、偏見や判断をせずに、オープンエンドに的確かつ簡潔に質問をすることだった。既存の研究で質的研究はほとんどなく、先行研究から得られるものはほとんどなかった。自分が何を聞きたいのかをきちんと明確にし、必要とする情報を得るため、焦点を絞らなければならかった。

研究の焦点を絞り込むのも難しかった。最終的に、パートナーを持つゲイ男性に焦点を絞ることになった。(トランスジェンダーと、シングル男性は対象者から除外した)

多様性に欠けている点は限界だが、グローバルにみられる分布を反映している。

Q. カナダでは、利他的代理出産が行われていますが、代理出産の依頼者(ゲイカップル)と代理母の社会経済格差は大きいでしょうか?

商業的代理出産が合法な国や地域では、代理母は低い社会経済階層の出身の傾向がある。利他的代理出産が行われているカナダでも同じ。依頼者は、年収 15 万ドルかそれ以上あり、大学教育を受けている高学歴層だが、代理母は、年収 6 万ドルくらい、大学教育を受けている人はわずかでほとんどが高卒。商業的代理出産を犯罪化したとしても、両者には依然として格差がある。

代理出産を依頼しようとすれば、かなり高額な費用がかかる。体外受精の費用、エージェントに支払う費用に加えて、あらゆることに費用がかかる。計 2 万ドルから 5 万ドルにプラスして、医療費の支払いがある。自分がインタビューしたほとんどの代理母たちは、依頼者とは別の街に住んでいた。だから移動や宿泊にもお金がかかる。

もし、依頼者にとって二人目の代理母であったり、3 回目の体外受精であったりすれば、当然費用はかさむことになる。だから、多くの依頼親は、経済的な安定を得てから、プロセスを始める。

@YURI HIBINO

代理母と経済的な側面について話さなかったが、彼女たちの多くが、低い社会経済階層の出身で、郊外や、田舎、人里離れたコミュニティなど(つまりは首都や主要な都市ではない場所)に住んでいた。だから彼女たちは地理的に依頼者とは遠く離れていた。

このことは、依頼者は代理母と地理的に近いことを理由に国内で代理出産を選んだわけではないことを意味していた。

代理母になったのは、次のうち一つもしくは複数の理由による。

1)妊娠するのが好き。

2)誰かを助けたい。

3)自分の子供と家族が大好きで、他の人にもそれを味わって欲しい。

4)LGBT の権利を支持している。

利他性の語りが顕著だった。特に、LGBT の権利を支持する人たちにとっては、自分が代理母になれば、LGBT の人たちが子供を持つのを助けることができる。

ほとんどの代理母が、自分の子供を産んだときの妊娠は楽だったと話した。そして、夫は非常に協力的であり、代理母になる選択を支持してサポートしてくれると話していた。代理出産は、カナダ社会でより可視的になり、人々の話題にのぼるようになり、身近になってきている。そのため、代理母に魅力を感じ、それをやってみたいと思う人が現れるようになっている。

Q. Gay Dads 向けのサポート・グループがたくさんあります。どのような役割を果たしていますか?

意外にもインタビュー対象者の多くが、サポートグループに入っていなかった。一人の父親は、参加していた。何人かは、LGBT の親の学級に参加して代理出産について情報を得ていた。しかし、彼らの多くが、代理出産の間、ゲイコミュニティから遠ざけられ、孤立しているように感じていると語った。それは、都市部から郊外に引っ越したなどの地理的要因によるものもあったが、若い世代のゲイたちから、自分たちが伝統的な核家族を真似ようとしていると思われているのを知って、疎外されたように感じていた。

サポートグループのミーティングと時間が合わないという理由もあったが、父親、あるいはゲイの父親に特化したサポートグループは少ないため、女性の参加者が大多数のグループの中で、自分がまるでよそ者であるかのような感じがすると語っていた対象者もいた。

この意味では、カナダには LGBT に関する進歩的な法律があるが、まだまだ多くの限界があるということになる。

不妊治療や生殖は、いまだ女性性や母性と強く結びついている。それは、アイデンティティとしての「父親としての男性」という視点を見過ごす傾向があることを意味する。

Q. 子供の出自を知る権利やテリングについて、啓発は進んでいますか?

多くの依頼親が、オープンであることを支持し、子供の成長段階に合わせて、正直に話したいと語っていた。

そもそも彼らの場合、隠す方法が存在しない。だから、誕生の物語の一部として、代理母とも連絡をとり続けたいと思っている。子供には、代理母に会う機会

@YURI HIBINO

を持って、代理出産のプロセスを理解してほしいと願っている。

その際、問題になるのは主に次の二点だ。

1.遺伝的父親は誰か。例えば、あるカップルの場合、一方が遺伝的父親になること、つまりドナーになると決めていた。別のカップルの場合は、ロシアンルーレットの様に、複数の受精卵を移植して、事前に子供の遺伝的父親がわからないようにしていた。

2.どのようにして遺伝的父親を子供に伝えるか。年齢に応じた言葉について、たくさんの疑問がわくのが普通。また、子供との関係のダイナミクスに影響を与えないよう、家族や友人に対してどちらが遺伝的父親かを隠すことも必要で、そのことに関しても多くの疑問が浮かぶ。

子供達の遊び場や、先生、スタッフなどから不適切な質問がくるかもしれない(マイクロアグレッションなど)。だから、子供に事実を伝えることを考えるとき、こうしたことにもどう対処するかを考える必要がある。

Q. 代理出産を依頼するゲイカップルはどのような偏見や差別に遭遇しますか? Gay friendly を標榜するエージェントは、そのような問題から彼らを守るのに役立っていますか?

自分が話を聞いた依頼者の多くが、代理出産のプロセスの中では、困難に遭遇しなかったと話していた。子供の親権に関する手続きをする際に、他人からのマイクロアグレッションを経験していた。しかし、こうした困難がある一方で、彼らがカムアウトした時、祖父母にはなれないと嘆き悲しんでいた両親との結びつきが強くなった人もいた。

ゲイカップルに対してサポーティブなエージェントはある。 しかし、代理出産のコンサルティングサービスはカナダではほとんどなく、あからさまな傾向がある。ゲイ男性の為にはサービスを提供したくないと、差別的な発言をするエージェントもある。

育児休暇を職場に申請できず、代わりに通常の休暇を取らされ、職場に不満を感じている人もいた。これは、ゲイの父親が経験するマイクロアグレッションの例だ。

Q. どちらの精子を使うかについては、どのようにして決定されますか?

親になりたいという気持ちは、人によって色々。ある人たちは、本能的に父親になりたいと願っているが、他の人はそうではないといったように。つまり、ゲイアイデンティティと父親としてのアイデンティティは異なるということ。多くのゲイ男性にとって、パートナーと出会う前は、親になることはできないと思っていた。だからある人たちにとってはどちらが遺伝的父親になりたいかは明らかで、他の人たちは、両方ともが遺伝的父親になりたい、だから複数の受精卵を移植し、どちらが遺伝的父親になったかは出産後に初めてわかるという方法を選ぶ。

また、もう一方のパートナーが遺伝的父親になるために二度目の代理出産を依頼することもよくある。これらの交渉には、選択、公正、インクルージョン、ずっと抱いてきた願望などが複雑に関わっている。

@YURI HIBINO

Q. ゲイカップルのために卵子ドナーや代理母になりたい女性にはどのような期待がありますか?

多くの代理母は、LGBT コミュニティに属するという理由で周辺化されている人たちを助けたいと思っていた。多くの女性が、信頼、ラポール、誠実さに基づいて長期的な関係を築きたい、そして、共通点を見つけたいと思っていた。それは、単に目的に対する手段というものではなかった。

だから、代理母たちの目的は、報酬や金銭ではなかった。彼女たちの関心は、自分がどのように扱われ、関係がどのように継続するかということであり、「自分と価値観や考え方が似ている人を見つけたい」ということ。多くの代理母にとって、出産前の経験は、この関係性を作ることを巡ってのもの。それは、ほんの少しだがオンラインデートに似ている。色々な質問をして、電話で会話して、その人の過去や興味関心は何かを考えたり、仲良くできるかを考えたりといったような。

大抵の場合、代理母と依頼者は、互いに同じような恐れを抱いている。相手が心変わりするのではないか、相手が去っていってしまうのではないかといったような。だから双方の信頼が不可欠になる。

Q. ゲイカップルの父親を持つ子供について、質的研究はあるでしょうか?

代理出産で生まれた子供に対する質的研究は、始まったばかりで、そのほとんどが告知や(ドナーや代理母の)医療情報を知ることにフォーカスしているようだ。

LGBT の親を持つ子供たちについて、他の親を持つ子供たちと違わないことを示す研究がある。つまり LGBT の親を持つ子供たちは、十分に適応して、発達している。

Q. 体細胞から精子や卵子を作ったり、子宮移植といった新しい生殖技術に対する期待やニーズは、LGBTQ コミュニティのなかで高いでしょうか?

自分の研究の範囲を超えているが、特に子宮移植についてはたくさんのことが書かれているのを知っている。この分野の進歩については多くの議論や熱狂がある。

男女カップルにとって代理出産は、長い不妊治療との格闘の後、最後の手段になる。それはしばしば、悲しみや喪失感、結婚生活の不満などで埋め尽くされている。依頼する女性の中にある緊張にフォーカスしたとき、代理出産はしばしば、非常に困難なものとみなされている。

それに対して、ゲイの男性にとっては、それは幸福感やワクワク感で一杯だ。彼らにとって、それは初めての選択であり、人生と子育てを確かなものにする方法であり、またとない機会になる。

トランスジェンダーの人の場合、子宮移植は、人生を肯定的にしてくれるだろう。新たなチャンスになる。

新しい技術は、生殖や親になることを巡って、公正さをもたらしてくれるとともに、憶測やバイアスをも減らしてくれる。

ゲイ男性にとって二人の父親であるとカミングアウトする(coming out as fathers)

@YURI HIBINO

ことは、一生続く旅になる。それは、社会には、親とは、母親と父親のことであるという前提があるから。技術の進歩は、この議論を前に進めてくれるし、家族というものの理解をもっとおし広げてくれる。対話をシフトさせ、新しい家族形態をメインストリームに押し上げてくれる。

Q. これからやりたい研究は?

現在、倫理、ヘルスケアの専門職の人たちの道徳的悩みに焦点を当てて研究している。管理上の制約のために道徳的に正しいと思うことをできない場合、どのような影響があるかを明らかにしている。 これは、パンデミックの時代にぴったりなトピックだといえる。

代理出産の分野に関して、生きられた経験を明らかにするために、質的研究がさらに必要だと思う。

代理出産は、非常に複雑で多面的な試みであり、その経験を持つ人々の興味深い考察やコメントは、政策や実行の変革に役立つし、家族に対する私たちの見方を前に進めてくれる。代理出産の法律や政策について話し合うときに、これらの人々に引き続きテーブルに座ってもらうことを望んでいる。結局のところ、彼らは誰よりもそのことをよく理解しているから。

Dr. Sophia Fantus　Link

The University of Texas at Arlington の助教
LGBTQ の健康と生殖およびエイジング、道徳的苦悩、デジタル時代における社会福祉の実践などについて研究している。
医療倫理コンサルタントの資格を持つ。

論文：

Fantus, S. (2020). A Report on the Supports and Barriers of Surrogacy in Canada. *J Obstet Gynaecol Can* 42(6):803-805.

Fantus, S. (2020). Experiences of gestational surrogacy for gay men in Canada. *Culture, Health and Sexuality* 23(10): 1361-1374.

Fantus, S. (2020). Two men and a surrogate: A qualitative study of surrogacy relationships in Canada. *Family Relations* 70(1): 246-263.

Fantus, S. (2021). Experiences of gestational surrogacy for gay men in Canada. *Cult Health Sex* 23(10):1361-1374.

@YURI HIBINO